



——士幌・然別湖線の道路開発——

士幌・然別湖線の工事起点附近のヘアピンカーブ前方は白雪山(1817m)〔北海道新聞社提供〕

裏大雪・然別湖 周辺の自然保護

北海道の十勝には、平原の湯の里として知られる十勝川温泉をはじめ、裏大雪山系にトムラウシ・然別峡・然別湖・糠平・幌加・芽登など、古くから温泉事業が盛んである。とくに最近では観光ブームにのって、いくつかな新しい温泉が誕生し、年ごとにさかんになるようすをみせている。これは十

勝が地理的には、表大雪山系の温泉地として著名な湧駒別・白金・上富良野・天人峡・層雲峡・温根湯などと、神秘の湖として知られる阿寒湖・摩周湖・屈斜路湖や最後の秘境といわれる知床などのほぼ中間にあつて、交通的にも観光的にも将来の発展が期待されるからである。豊かな自然美を観光開発しようとするところみや、温泉地間を立派な道路でむすび、多くの観光客を誘致して、町や村の発展に利用しようと考えてるのは、過疎化になやむ大都市にとつては当然のことであろう。大雪山縦貫道路なども、産業道路といいつながら、結局はこうした域を出るものではない。

◇
一般道道士幌・然別湖線は、一般国道二七三号線糠平・層雲峡間の開通を目前にして、糠平・然別湖・阿寒湖または帯広市という観光ルートに、士幌高原の雄大な牧歌的景観を加えるべく計画されたもので、純然たる観光開発道路である。問題は、道路工事区間が、すべて大雪山国立公園として保護されているところであり、しかも標高は五〇〇m～九〇〇mで低いにもかかわらず、高山の珍獣といわれるナキウサギや高山植物のお花畑が染しめ、また見事な崩壊地植物群落をもつところで、環境が破壊されると復元困難な地域であるばかりではな

く、自衛隊然別演習場の弾着地点に隣接しているということである。土幌町は昭和四十年二月、町道土幌然別間線道路として観光開発すべく十勝支庁を通じて申請し、道・建設省・農林省・厚生省などの複雑な手続きをなすとげ、十月に工事の一括認可をうけ、昭和四十一年度から町営工事としてすすめてきた道路である。その間、昭和四十五年年度には一般道道土幌・然別湖線に昇格せしめ、現在は道営工事として建設がすすめられている。

この道路は、土幌市街から一般道道線平・鹿追線の白樺峠まで二三・四kmで、工事区間は六、八九八m(当初)である。工事起点は土幌農業協同組合直営牧場(通称新田牧場)と大雪山国立公園の境界で、すぐ国立公園内の白雲山外輪の南面中尾根を約三、三〇〇mのヘアピン・カーブで開削し、東ヌブカウシ山の東斜面と白雲山西斜面の谷間を切り開き、沢ぞいに登りつめて東ヌブカウシ山の北西斜面から駒止湖の南東上手を開削、糠平・鹿追線の名所・西ヌブカウシ山の千疊崩を終点とする幅員5mの車道で、土幌・然別湖間の最短路線を造成しようというねらいである。また、土幌町が単なる通過地点になつては意味がないと、高原の牧場などを利用して国民休暇村を建設し、牛乳風呂や遊技施設などをもう

け、観光地として売り出そうという構想がふくまれている。酪農振興と観光開発の二面作戦は、過疎化対策にも通じ、財政的にもうるおうという、選挙スローガンにしたような将来計画である。

しかし、おらが町の発展のためのこの道路計画は、はたして真の発展につながるだろうか。国民の貴重な共通財産ともいえる国立公園としての自然を破壊し、一地域の一時代の人間社会の繁栄にしかならないのではないかと、大きな疑問をいだく。当初から土幌町や支庁・営林局関係者に、後のべるように事の重要性を説明してきたが、環境庁の発足する五年も前の社会状況では正式に関係官庁の認可をとっているため、一個人としての意見は聞きおく程度以上にはいならなかった。しかし、その後も関係方面に重ねて再考を要望し、道自然保護協会の理事会でも検討をねがった。その結果、昭和四十五年十月三十日付で、道知事と帯広営林局長あてに要望書が郵送された。しかしそこには道路建設については一言の反対意見もなく、道路建設の肯定のうえに、植物群落の保護や盗採に留意せよ、入林者への指導に努めよという要請にとどまった。これでは自然保護に対する努力は認められても、保護の理念を失った一枚の文書にすぎない。大石環境庁々官の尾瀬の

発言以前であり、これ以上は体質的に望み得なかつたといえよう。その間、大衆世論の喚起をよびかけるべく、一部の報道関係に協力をもとめたこともあったが、支局段階ではせつかくの原稿も政治的にボツにさせられ、田舎の社会の複雑な力関係を味わった。

そのみならず、一部の地方紙では、元旦の新春対策として「……これは自然保護・動物保護に共鳴する一部の自然保護協会の『なき鬼』保護論を唯一の口実としているが、十勝いや道東の開発がおくれたのは道路交通が後手にされてきたからです。……なき鬼』を鳴かせて『人間』を泣かせることのないよう、北海道開発の百年の大計をあやまらぬようお願いしたい」と、道知事に対して要望している。対談者の社長さんが、私どもがナキウサギをよく鳴かせるために原始の自然を保護する努力をし

そのことがわれわれの子孫を泣かせないためにも最も大切なことなのだと、いふことを、ご承知いただけないのは、まことに残念である。

この道路建設の認可にあたって、大雪山国立公園内の工事でありながら、国有林の管理者である帯広営林局も、国立公園の管理者である厚生省も、また地方行政の府である十勝支庁も、工事予定路線の現地調査

を行なつたようすはまかつたくない。この地帯の国有林は、風衝未立木地となつている関係上、林業経営上に重大な影響はなく、調査の必要はないと判断してのことであるうし、国有林管理者が認可すれば厚生省も道も、積極的に反対する理由がなく、簡単に認可が得られたようである。だが、そこに大きな問題がある。それは、自然保護とくに生態系についての基本的認識や生物相に対する価値観、あるいは地域開発に対する基本的理念の相違である。

然別湖付近の山々は、然別火山群とよばれる。十勝団体研究会の報告によれば第四紀のはじめに活動を開始したらしく、山頂に火口のない火山群として知られている。いまは、まったく活動を停止しているが、最後の活動は沖積世の初頭におこつたらしく、東西ヌブカウシ山の山すそのスロープには熱帯性堆積物が広がり、大きな被害をもたらしただけで、今日の植物相はその後、約一万年もかかって永々と復元してきたものであろうと推定されている。火山火口は、現在の駒止湖と東小沼といわれ、山々の岩質は角閃石を輝石安山岩が主である。こうした地質的要因や風衝地という強風で寒冷な気象条件によって、海拔六〇〇m〜九〇〇mでありながら高山植物相の景

観を示している。

湖畔側にはエゾマツ・トドマツのうっせうとした樹海がみられるが、その上部風衝地にはシラカバやダケカンバ・ナナカマド・イチイが生え、さらに上部にはハイマツやシャクナゲ・ウラシマツツジ・エゾイソツツジなどが優占し、露岩地帯にはツガザトラ・ウサギギク・ミヤマヤナギ・タルマエソウ・ガンコウラン・コケモモ・ミヤマリンドウ・ゴゼンタチバナなど、種類こそ表大雪のお花畑おとるが、トムラウシ山の日本庭園にも似た優雅な景観を呈するところも少なくない。また、白雪山の西斜面や東ヌブカウシ山の東斜面には矮生ながらエゾマツの天然更新した崩壊地一斉林が残っており、トドマツやダケカンバ・イタヤなども風雪に耐えて立派に機能している。

しかし地質的に岩石やその砕屑層であるため、根は浅く発育が悪く、立ち枯れや風倒木も目につく。風倒木の大きな根穴には、珍らしいヒカリゴケが発見され、無気味な光をはなっている。こうした陰湿な雰囲気や漂う原生林からは、エゾフクロウやクマガエラの無気味な鳴き声がひびき、エゾムシクイ・メボソムシクイ・エゾカヤクダリ・ルリビタキ・ヘンソンハンシブトガラなどの姿をみることが出来る。時たま姿をみせたエゾライチョウもコルリもミソサザイも、工事ははじまってからは、いつしか遠のいてしまい、いたるところの岩場に生息していたナキウサギもシマリスもエゾリスもお花畑から顔をあまり出さなくなった。この地帯一帯は、ナキウサギの生息地としては北海道随一であるといっても過言ではない。また、かつてはエゾタヌキ・キタキツネも牧草地に遊びに出るほど多かったし、エゾシカの小群もよく姿をみかけた。林縁にはエゾノウサギが遊び、エゾイタチ・コエゾイタチの姿もまれに見ることができ、生物相にめぐまれてきている。つまり植生の推移帯で、しかも高山植物帯をあわせもつという特異な環境条件を備えたという、特別な地域であるといえよう。

しかし、ちよつと見ただけでは東ヌブカウシ山などは、山全体は一面のササ原で、白雲山も石ころだらけの山としかみえない。なんのとおり得もない山に道路をつけ、活用することこそ開発であると考えるのも、無理からぬことといえよう。だが精密に調査すると、まことに学術的価値の高い地域であり、また一度破壊すると復元困難な環境であることが明白である。都市近郊で、ナキウサギのような高山動物のすむところが他にあるであろうか。然別湖畔のような標高の低いところまで生息することを考えると、あたかも大雪山系黒岳の山頂や高根ヶ原に、車道を建設するようなものであることがうかがわれよう。

◇ 自然保護に狂心的なあまり、反対をとなえるつもりはもうとうないが、応用動物学の一研究者として、道路建設の中止を要望するのは後世に対する責任でもあろう。また一歩後退して、最悪の場合でも車道としての利用は、なんとしても止めたい。この地域は自然景観がとくにすぐれ、生物相の特異なことから、自然教育の場にふさわしいことは確かである。建設した道路も、自然歩道として活用することは可能であろう。町営の大規模草地に憩い、新鮮な牛乳を腹一杯に飲み、雄大な大地に草をはむ育成牛の大群と遊ぶ。山にはいつては高山植物のお花畑を楽しみ、岩場に遊ぶナキウサギの生息を勉強する。また風衝地の林相をながめ、樹間にとび交う小鳥たちの姿や、鳴き声を楽しむといった明るく健康な牧歌的休養を楽しむという構想も、特異な国民休暇村としてよろこばれ、町も大きく発展するだろう。車道を通して二〇分そこそこ早く目的地につくことに、どれほどの意義があるろうか。

また隣村鹿追町の立場を考えると、鹿追町商工会や観光協会が建設に反対しているように、然別湖・鹿追町・土幌町または帯広市というルートが、然別湖から土幌町に短絡されたのでは、鹿追町の発展に大きなさまたげになることは否定できない。根室本線に新狩勝トンネルができたとき、新得町を通らずに落合から十勝清水町に直行できるにもかかわらず、大きく迂廻して新得町にたちよることにしたのは、地域共同体としての共存を考えてのことであろう。土幌・然別湖線の建設には、こうした大局的見地から行政的な検討もなしに、あまりにも安易に認可されてしまった。営林局・支庁・道などの関係者は、この道路建設の非を悟ったようであるが、計画変更のイニシアティブをとろうとはしない。大石環境庁長官に直訴する以外に方法はないのだろうか。分村した土幌町が温泉町として発展したことは、本家としては心おだやかではないだろうが、いま車道を通すことはそれこそ後塵を拝するだけであろう。健康な町づくりはやがて芽を出し立派な木となり、見ごとな花を咲かせることだろう。

◇ 自然に親しむ人を育てることこそ、平和国家をめざす日本にとって、もつとも緊要なことではないだろうか。

(帯広畜産大学生物学研究室)